論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　教育学　）	氏名	小口　悠紀子
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

日本語学習者の主題の習得に関する研究

論文審査担当者

主　　査　　教授　　畑佐　由紀子
審査委員　　教授　　酒井　弘
審査委員　　教授　　白川　博之
審査委員　　教授　　深澤　清治

〔論文審査の要旨〕

本論は，談話における主題の習得について，中国語を母語とする日本語学習者と英語を母語とする日本語学習者を対象に，日本語母語話者との比較を通して検討するものである。具体的には，ガ格，ヲ格，ノ格の主題化構文の受容度と物語描写における主題管理に用いられた形式を手がかりに，主題化の習得に母語が及ぼす影響について類型論的な観点を含めた考察を行った。本研究の検討課題は以下の 2 点である。

検討課題 1．日本語学習者は，主題化に関して母語話者と同様の言語知識を有しているか。もし有していない場合，学習者の主題化の知識に母語はどのように影響するか。

検討課題 2．日本語学習者は，談話において母語話者と同様に主題管理ができるか。もしできない場合，学習者の主題管理に母語はどのように影響し得るか。

第 1 章では，学習者にとって主題の習得が困難であるが，その具体的な要因が解明されていないこと，学習者が何を主題として談話を展開し，どのような形式で主題を管理しているのかを，体系的に調査した研究が殆どないことを指摘した。その上で，本研究では，類型論的に異なる特徴を持つ言語間の比較を通して母語の影響について検討することを示した。

第 2 章では，先行研究の考察を基に，残された課題として，(1) 先行研究は探索的手法の研究の蓄積が中心であり，学習者の持つ言語知識や習得に影響を及ぼす要因について具体的に検討されていないこと，(2) ガ格以外の主題化の習得について，検討が進んでいないこと，(3) 母語の影響を主張するために，類型論的に異なる母語を持つ学習者を対象とした調査がなされていないことを述べ、これらを研究課題として提示した。

第 3 章では，受容性判断課題を行い，学習者の持つ主題化の知識について報告した。実験 1 では，ガ格の主題化について，ガ格の名詞句が，先行文脈に既出の場合「は」を付与する（主題化）が，未出の場合「が」を付与するという言語知識を，学習者が有しておらず，母語に「標識」がないことがガ格の主題化の習得に影響する可能性を指摘した。実験 2 では，ヲ格の主題化について，(a) ヲ格の名詞句が文頭に配置されるという知識を，中国語母語話者は有しているが，英語母語話者は有しておらず，母語に「文頭配置」がないことがヲ格の主題化の習得に

影響する可能性を指摘した。(b) 母語にかかわらず学習者は，「は」が文頭に来やすいという言語知識を有しており，母語に「標識」がないことは，ヲ格の主題化の習得に影響しなかった。実験 3 では，ヲ格の主題化について，ヲ格の名詞句が，先行文脈に既出の場合「は」を付与して主題化するという言語知識を有しており，母語に「標識」がないことは影響しなかった。 実験 4 では，ノ格の主題化について，英語母語話者は「XハＹガZ」文の評定値が低く，母語に「構文」がないことがノ格の主題化の習得に影響する可能性が示唆された。中国語母語話者はＹが親族関係の場合，所有物ほど受容せず，母語の「Ｙの意味的制約」が影響する可能性を指摘した。

第 4 章では，物語発話産出課題を行い，学習者の談話における主題管理について，報告した。

(1) 母語にかかわらず，学習者は，登場人物を物語に導入する際，「が」で言及することが難しく，特に三人称の場合に困難であり、母語に「標識」がないことが影響している可能性を指摘した。

(2) 母語にかかわらず，学習者は，人物を主語位置，動物を目的語位置で導入しており，有生性のスケール（Comrie 1981）と登場人物の役割の重要性が主題管理に影響している可能性を示した。

(3) 母語話者も学習者も，連続性が高い状況で「が」を用いる例が見られたが，母語話者と学習者では使用傾向が異なることがわかった。

第 5 章では，各章の研究結果をまとめ，総合考察を行い，本研究の成果と教育的示唆，今後の展望を述べた。

本論文の内容は，以下の点を中心に高く評価できるものである。

(1) 検討の困難さから研究が進んでいなかったヲ格の主題化や「XハＹガZ」文について，要因を統制した受容性判断課題を用いることで，これらを検討可能とし，学習者の母語によって，難しさを抱える箇所が異なることを明らかにした。

(2) 主題卓越構文のひとつである「XハＹガZ」文について，類型間だけでなく，類型内においても母語の特徴が影響することを立証し，負の転移を引き起こす事例を示した。

(3) 受容性判断課題と物語発話産出課題という，理解と産出を測る課題を併用し，総合的な考察を行うことで，学習者の産出に見られた導入時の「が」の使用の難しさや「は」の過剰使用，二度目の言及時の「が」の使用について，知識面から補完的な考察を行い，母語に「標識」がないことが習得に影響する可能性を指摘することができた。

(4) 談話における指示対象が先行文脈に既出かどうかという基準のみならず，登場人物の有生性や役割の重要性という指示対象自体の特性，及び，属性や内容の意外性といった諸要素が，指示対象の選択にかかわることを示した。また，日本語母語話者と学習者による言語形式の使用の背景には，異なる原理が存在する可能性を指摘した。

本論文は，被験者数，要因の統制，量的，質的分析の結果と習得理論との結びつきが不十分など今後検討すべき点が見られるが，日本語の主題の運用を支える知識を日本語，中国語，英語という類型論的に異なる三言語を用い，総合的に分析した意欲的な研究である点で高く評価できる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成　27　年　　2 月　19 日